

子ども×放課後×地域が、失われかけた「間」をつくる —弦巻小 PTA サークル「IBASHO」における保護者たちの取り組み—

久米 朋子

KUME, Tomoko

岡田 陽子

OKADA, Yoko

(IBASHO)

IBASHO は、新 BOP¹⁾ 学童クラブ卒後の子どもの放課後生活に問題意識を持った小学 3 年生保護者(当時)を中心に、2019 年 3 月「高学年の居場所づくりサークル(略称 IBASHO)」としてスタートした。「家でも公園でもゲーム」という子どもたちの様子を見聞きする中、我が子たちにはゲームだけでなくさまざまな体験をして欲しいと切実に願ったこと、頼りにしていた BOP がスペースや職員の不足もあって実は高学年の居場所になり得ていない実態を知ったことなどが活動背景にある。ひとりの母の呼びかけに呼応した数名で動き出し、昨年度活動 2 年目には、新型コロナ禍にあっても地元商店街や町会、学校、行政等の協力により、商店街を歩行者天国にした「みちあそび」実施に至った。

活動 3 年目になり我が子たちが卒業を控える今、これまでの活動を振り返り、働く保護者の地域参加、各々の日常上にある活動、新型コロナ禍での催しの背景、そして、活動から得た気付きと今後への提案について述べていきたい。

1. サークルの設立「一緒に考えよう」

はじめは働く母の「困った！」という呼びかけであった。習いごとや塾、民間学童等によるこの時点での解決策すなわち居場所の確保を済ませた家庭、留守番でもなんとかかなりそうな家庭等、状況は様々であったが、「なんとかなっていることが『子どもにとっての良い環境』であるとは言えない」ということを直視し、放課後問題が働く保護者だけの課題ではなく「すべての子どもにとっての育ちの環境問題である」という思いを共有する中で、「一緒に考えよう」と数名が集まった。時代を超えて子どもたちが三間(時間・空間・仲間)を奪われ続けていることにも気付かされ憤慨しながらも、学校施設を利用し子どもを地域とともに育む学童を今や全国展開する NPO 法人放課後 NPO アフタースクールがここ世田谷での市民活動から興ったことを知り、刺激を受けた。小さな集まりをサークル化したのは、4 年生になる我が子たちが卒業するまでに課題多き子どもの放課後環境を変えていくため、保護者たちの協働と、地域・学校・行政などとの連携を図るためであった。

2. 活動1年目 水曜日遊び DAY スタート、最初にして最大の山は夏休み

新年度、まずは新 BOP や学校、児童館をめぐり、「夏休みのお弁当を学校施設で食べられませんか?」「高学年の子どもたちがもっと行きたくなる BOP づくりを一緒にできませんか?」と相談したが、大規模校の弦巻小新 BOP においてはスペース・人員不足という改善が見通せない壁があり「気持ちでは応援するけれど、協力できる余力がない」のが実情だった。前述の放課後 NPO アフタースクールの平岩代表も訪ね、親身に相談にも乗っていただいたが、現行制度のなか、すぐに取りれる策は見つからなかった。

しかしとにかく懸案の夏休みの見通しが立たなければ困る。5 月に入り、地域の居場所を探し「駒沢はらっぱプレーパーク」(以下「はらっぱ」)に通いはじめたことが、その後の活動に大いに影響した。(区の委託事業であるプレーパークの説明はここでは省く。)

保育園と学童に助けられフルタイムで働き続けてきた保護者と、保育園・学童育ちの小中学生(特に第一子)は、限られた時間のなかでよほど意識的に行動してこない限り、地域に疎い。しかも、小学生を取り巻く「地域」、つまり学区とその周辺と、それまで保護者自身が「地域」と認識していたそれとは必ずしも一致しないのだからなおさらである。小学校入学を機に転居することもよくあり、「もともと地元」でもない限り、小学校入学後あるいは学童卒後にはじめて必要に迫られようやく地域に目を向けることになったとしても、全く不思議ではない。

「はらっぱ」に2度3度と通い続けるうちに、最初は遠慮がちに遊んでいた学童育ちの子どもたちが自分なりの遊びを見つけ、ここを「マイスペース」化しつつあることに気付く。その後、子どもたちの遊びの豊かさや人それぞれの思わぬ力を何度となく見せられ、「きっかけさえあれば、子どもは自ら力を発揮する」ことを実体験として確信した。大人にとっても、仲間やプレーワーカー、世話人ほか居合わせた誰かしらと雑談を交わせるここは週に一度の楽しみ場であり、今では IBASHO のあらゆる企画を生み出す貴重な井戸端となった。水曜日遊び DAY は子どもを地域に促すひとつのきっかけとして「放課後の長い水曜日、『はらっぱ』で待っているよ。慣れていない子は引率するよ。」と誘い、雨天決行、ほぼ無休で、現在も続けている。たまたま休みの合ったメンバーを中心にわかりやすく定期開催できていること、そしてこの居場所の持つ力(場の魅力×人の魅力)の大きさが、IBASHO というサークルの核になった。

4年生の夏休みには、①炭火 DE ランチ、②夏休みのお昼を一緒に食べよう会、③IBASHO の遠足を実施した。①は、夏休み直前の給食の無い日に「はらっぱ」プレーワーカーの協力で行った。買い物、炭火起こしを自分たちで行い、ようやくお昼の餃子の皮ピザにありつけたのはおやつ時間、という散々な有り様であったが、何よりも自分たちだけでやり遂げた達成感が子どもたちの顔を輝かせていた。②は、副校長が夏休みの教室利用を提案してくださったことから実現した。夏休みのはじめと終わりの述べ6日間、午前中を BOP で過ごした4年生たちが、帰宅することなくみんなで弁当を食べる場の運営を保護者が当

番制で担った。夏休み後には、夏休みの過ごし方に関する保護者アンケートを実施し、夏休みの孤食、選択肢の少ない安心な居場所、日常的な体験不足等の課題を共有した。③は、「はらっぱ」休園時期に、「学区を飛び出し、区内のいい場所を探しに行こう」と、初年度はきぬたまあそび村の多摩川遊びのプログラムに団体で参加させていただき、身近な自然のなかで思いっきり楽しむ体験をした。

こうして1学期から夏休み、継続的に子どもたちと過ごし、私たちは彼らの驚くべき成長率を目の当たりにし、同時に自立してゆく子の保護者としての育ちの時間も得られた。夏休みという山を充実感とともに乗り切った頃には、我が子たちに対する保護者としての自信も地域への信頼も増し、サークル設立時の不安感はほぼ解消されていたように思える。

3. 保護者の協働、地域・学校・行政との連携

IBASHOはその中心的活動である「水曜日遊び DAY」を継続しながら、平行して「保護者同士のゆるやかなつながりづくり」としての茶話会や講座、そして「地域・学校・行政や他の活動グループとのつながりづくり」を行ってきた。

前者は、特に強く意識を持たずとも保護者同士の交流できる機会を持つことで保護者の孤立を防ぎ、次のステップでは協働の場をつくるという目的を持つ。「強く意識を持たずとも」という点は大変重要だ。それは子どもの自立が「家庭内で解決すべき」問題であると、つい思いがちだからである。依存せずに生きられる人などいない。だから依存しづらい現代社会において「おかしい」「困った」と声に出せない人は気付かぬうちにいとも簡単に孤立してしまう。孤立が招く不信から、子どもを地域に送り出せなかったかもしれない自分とて、十分に想像できてしまうのである。

後者の目的は、直接的に今ある環境の改善を目指すと同時に保護者が地域社会への安心感や信頼を得て子どもを地域に送り出しやすい環境をつくることである。学童卒後の高学年の居場所は、「BOP」「児童館」「地域の公園」「プレーパーク」「地域の方が運営する居場所」等、施策上は、ある。しかし前述のとおり BOP は高学年の居場所にはなり得ておらず、そもそもどこであれ本人が馴染まなければ大人が促してもそこはその子の居場所とは言えない。民間学童や塾、習い事を学童と置き換えている場合（中学受験のための塾の開始時期にも重なる）子ども本人の選択機会が無いまま成長する可能性もある。そのような環境下であっても本人意思で選択し得る、時間と空間のすき間をぬうような場づくりだって必要だろう。地域を知れば、足りないのは居場所以上に導線ときっかけであると、早々に気付く。物理的に良質な居場所を増やすことと、子どもが選択権を持てる環境整備は両輪である。これらは保護者のみの力では成し得ず、行政や地域からのサポートが必要だ。IBASHO では次図のように、保護者・学校・行政や各居場所が、子どもの権利条約や子ども条例等の理念を共有したうえでそれぞれ役割を担い、地域の子どもの見守っていきいたいと考えるが、そこで必要とされる地域と学校・行政を有機的に繋ぐコーディネート力の担

保は、今はまだない。

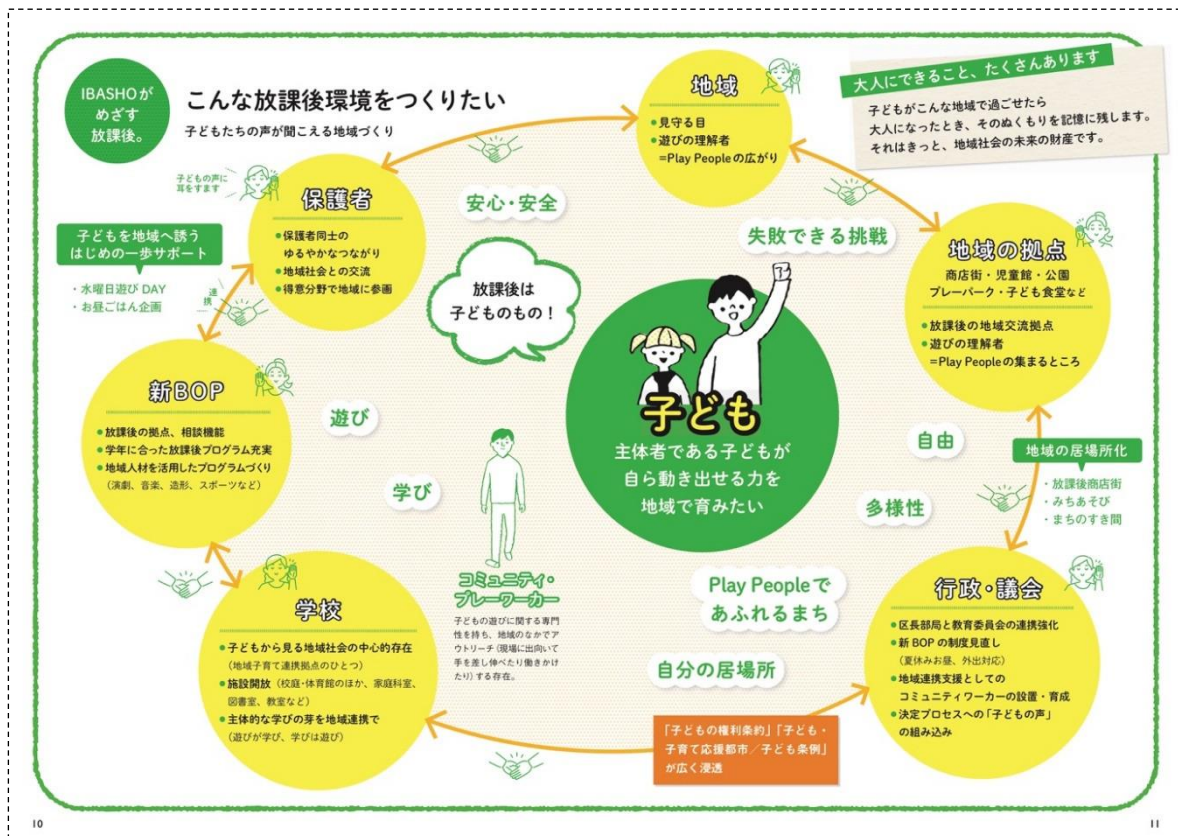


図 1. IBASHO がめざす放課後環境

冊子「放課後の居場所はたからばこ」（2021年3月IBASHO発行）よりP10-11

4. 新型コロナ禍に対するレジリエンスとしての「みちあそび」

1年目の年末に縁あって世田谷区の外遊び推進員Kさんとの出会いがあり、次年度に向けて「子ども主体」に重心を置いた活動計画立案に加速がついた。その矢先、IBASHO1周年頃に直面したのが新型コロナ禍である。突然の休校から数ヵ月で、この「会えないタイプの災害」は、否応なく身近な社会にある障害を見せつけた。

- 子どもの居場所が少なく、子どもの「声」が社会の中心に届かない。
- 学校とのコミュニケーションが不足していた。
- 気軽に声を掛け合える保護者同士の関係が行き渡っていない。
- 非常時の今、困っている人が、どこにいて、どう困っているのかを知らない。
- 大人も子どもも「自分で考え判断し行動する」ことに慣れていない。

しかし考えてみればこれらは以前から日常に潜む課題が表面化されたものに過ぎない。私たちは、従前よりももっと良くなろうとする内なる反発力（レジリエンス）を感じながら、「子ども主体」で立案したIBASHO活動計画はむしろこの時こそ進めるべきものと捉えた。沢山のあたり前が出来なくなったが、この時だからこそそのチャンスもあり、休校開校、Kさんから知恵や情報を得てゼロから方法を見直したどり着いたのが「松陰神社通り

のみちあそび」の企画である。「子ども主体」「保護者の協働」「地域・学校・行政との連携」これらを全て「みちあそび」実現のプロセスに落とし込んだ。9月から準備を始め、町会や商店街の協力によりなんとか道路使用許可を得、11月にはKさんを講師としてプレ講座「家で、まちで、あそぶ姿から見えてくる 子どもの声を聴いてみよう」をPTAとの連携により実施。定員を絞り全4回に分け、保護者・学校教職員・新BOP職員・地域（町会・商店街・青少年委員や学校運営委員等）・行政（児童課・児童館職員等）から40名超の参加をいただいた。



感染者数動向により開催までギリギリの調整が続いたが、臨機応変に実施内容を変えながら、12月6日、実施に至った。高学年の子どもたちはチラシをつくり挨拶しながら配布し、当日も運営や片付けなどの仕事を担ってくれ、その姿に刺激を受けた低学年の子どもたちは700枚以上のポスティングを開始、ポスト探しで遊びながらそれを達成した。

5. 外遊び推進員（Community Playworker）の存在意義

5.1 伴走

「みちあそび」の準備段階から当日、その後の振り返りまで、伴走者として寄り添ってくれていたのが前述の外遊び推進員Kさんである。外遊び推進員は、世田谷区のパンフレット「せたがやの外遊び」の中で「子どもたちの外遊びの場や機会の充実には、地域の住民の皆さんや保護者の方等、周りの大人の理解や協力が必要です。外遊びに関心を持ち、協力してくれる大人が増えていくよう、外遊び推進員が外遊びの大切さを伝え、地域で外遊びを推進するための人や団体のつながりをコーディネートする取組みを進めています。」と説明される。まさしく「人や団体のつながりをコーディネート」という点において、思いがあつて経験と地縁の足りない活動2年目の団体が、地域の協力を得ながら企画を形にするための大きな役割を果たしていただいた。先に「今はまだない」と述べたコーディネート力も、Kさんにおいては見事に発揮されていた。もう1点強調しておきたいのは、Kさんが（おそらく区からの受託範囲を超えた個人的技量として）「外遊び推進」の先にある「子どもの育ち」という命題についての広角度な知見を持ち合わせ、かつ、常に「子ども主体」から焦点をずらさない存在としてそこにいてくれたことである。

5.2 アウトリーチ：手を差し延べること、働きかけること

外遊び推進員は「アウトリーチ」をする。実際、私たちもそうと知らずにアウトリーチを受け、それはまさに「今その存在が必要だった！」と思える絶妙なタイミングであった。「お手伝いできますよ」と手を差し延べ、私たち自身の主体性の尊重をしつつ、話し合うべきこと、決めるべきことについてさりげなく働きかけをしていただいていたのだ。

活動報告

「タイミング」は重要である。例えば学童で考えると小4進級前は家庭で子どもの自立を考える大きなきっかけとなるタイミングであるが、実際は全員一斉に「学童から自立」するわけではなく、子どもそれぞれの性質や環境により本当のタイミングはまちまちである。学童から「ゆるやかな支援」として段階的に自立を促す声掛けがあっても、我が子どもとして直面するその時までは、保護者自身の意識の中になかなか情報が入ってこない。つまり、新しい一步を踏み出すに必要な「きっかけ」の、そのタイミングと届きやすい形は、人それぞれなのである。となれば、きっかけは小さく数多く、必要となるわけで、制度で整えるよりも、人による「アウトリーチ」が有効であろう。

6. 「まわりをちょっと良くしたい」当事者の力の連鎖

IBASHO は、その設立背景からも課題解決型のサークルとして「自分とまわりのこと」に対する当事者性を大切にしながら活動をしているが、当初の課題に当事者として向き合える残り時間は既に少ない。実際、きっかけとなった子どもたちはもう親の言うようには動かず、今も活動の中心年代はやはり3、4年生である。小学生子育てをしていると目の前の課題や悩みは次々と入れかわる。だとしたら、課題解決とはほとんどの場合、小さなトライを積み重ねながら少しずつでも前進し、それを次世代につなぐことで成していくものなのだろう。子どもをきっかけに動き出す当事者としての保護者の存在は地域社会にとって貴重であり、その活動を広げようとするならば、学区や地域ごとに、その小さなトライを後押しするような仕掛けが重要ではないか。例えばコミュニティプレーワーカー（前述外遊び推進員を土台にIBASHOが提唱する「子どもの遊びの専門性を持ち、ある地域の中でアウトリーチする存在」を指す）が地域にいて数年毎に生まれるであろう当事者活動がもたらすその地域の活気を、想像してみたい。

7. 高学年ではもう遅い？

IBASHOの活動を説明しようとするとき、共働きの先輩保護者たちからは大いに共感を得た一方で、「高学年の放課後を親が？」「過保護では？」「乳幼児期が大事だよ」という言葉や視線も受けとった。IBASHO発行の冊子²⁾に掲載した岡田のコラムを引用する。

「(前略) たしかに、4年生10歳という年齢は、適切な環境さえあれば、自分で考え、行動して、道を切り開いていく力が十分にあります。けれども、いま、その『環境』が整っていないのです。地縁の希薄化、核家族化、共働き家庭の増加、サンマ(三間：仲間、時間、空間)の喪失などなど…。その理由は数えればきりがありません。さらに、子どもたちの声が届かない縦割り行政が子どもたちに与えている影響ははかりしれません。それでも、世田谷区には、プレーパークなどがあり、行政、学校、地域、保護者が連携しながらともに子どもたちの声に耳を澄ませている事例があります。そこでは、幾度となく、子どもの力の果てしなさと出会い、地域のあたたかさに出会いました。高学年の放課後の姿は、地域

の未来をうつす鏡です。息子が小学3年生の冬、私は、その鏡に荒涼とした景色を見ました。そして、それを『かつての常識』にあてはめ、親子の課題にとじこめるとき、私たちは社会の課題から目をそむけ、未来への希望も手放しているのだと感じました。『高学年の放課後』にこだわる理由は、この見えにくい構造を可視化させるためです。いままでの常識ではなく、目の前の『高学年の放課後』から見えるものがすべてです。(後略)

過ぎさったことはともかく、当事者である私たちは今日の前にいる子どもたちのことを考える。中学校で実質的に地域を離れる子も多いなか、3、4年生からの地域デビューは、人生において信頼できる地域を持てるか否か、最後の分岐点になる可能性があり、中高生や青年期に見られる諸課題への予防的取組にもなるだろうと考える。だからこそ、ここは大変重要なタイミングなのだという認識を広げたい。

8. おわりに

私たちは活動を通じて子どもたちの、自分たち自身の、そして地域の潜在的な力を感じている。子どもの放課後にまだ未知の「間(ま・あい・あわい)」を呼び起こせると思っている。それにはあと少し、公的サポートが必要である。前述冊子より行政への提案を引用し、結びとする。

【「子どもの声・子ども視点」を、施策決定プロセスに位置付けて!】

コロナ禍というある種の災害のなか大人たちは忙殺され、休校にしても遊び場閉鎖にしても行事の中止延期にしても、子どもたちは納得感を持てるようなせめてもの説明すら、ほとんど得られませんでした。現状を転換し、子ども主体を行き渡らせるためには、「子ども視点」が区や教育委員会の子どもの関係するあらゆる施策決定プロセスに明確に位置付けられる必要があると考えます。それにより子どもたちは、地域社会で何ごとにおいても尊重されたという経験を得て、主体者としての自信を培うことで、かけがえのないひとりとして、すこやかな自立に向かっていけるはずです。

【区と教育委員会は、真に連携し、地域連携の現場を制度で支援して!】

子どもを中心に考えたとき、あらゆる施策において区と教育委員会との所管の違いを超えるための取り組みを進めていただいたうえで、次のように要望します。

●新 BOP 学童クラブを拠点に子どもの地域デビューをかなえる運用拡充

現在学童は BOP と一体であるとして学校内の限られた施設に固定され、また職員欠員の常態化もあって、子どもたちは場所に縛られ放課後を過ごしています。ですが本来の役割を考えれば、学童が地域へ誘う繋ぎ役を担うことは子どもの育ちにとって重要です。そのため、外出拠点、保険適用等含めた、地域連携による新 BOP の柔軟な運用を求めます。

活動報告

●地域単位でアウトリーチする「コミュニティプレーワーカー」の設置・育成

保護者も地域も現代的課題を抱えるなか、子ども計画のもと、地域社会が子どもを主体者として尊重し自立を見守るため、学校や保護者、地域人が真に連携を進めるには、専門性を持ち、管轄や立場を超えて地域内の特性をとらえてアウトリーチする存在（コミュニティプレーワーカー）が必要だと考えています。それによっではじめて「地域連携」が行き渡るのではないのでしょうか。

[注]

¹⁾ 小学校施設を利用し、原則3年生までの生活の場である「学童クラブ」と、6年生までを対象とする遊びの基地「BOP (Base of Playing)」の2機能を一体化させ、子ども部と教育委員会の共同所管で運用されている世田谷区の施策。

²⁾ 冊子「放課後の居場所はたからばこ」（2021年3月 IBASHO 発行）